この人に聞く　中島哲宏さん

地学団体研究会との出会いが、私の出発点

【略歴】

・１９４２年生まれ
・１９６５年新潟県立高校教諭として採用。
　県立栃尾高校、加茂高校、新津南高校に勤務。
・２００３年退職
・現在、石油の世界館友の会事務局長

編　集　部

生まれは新潟県でないんですね

１９４２年（昭和１７年）８月、満州国新京市（中国吉林省長春市）で生まれました。父は北海道の電電公社に勤めていましたが、退職して満州国の逓信省に入りました。通信事業は、軍にとって重要なインフラだったので、兵役には着きませんでした。おかげで敗戦の大混乱の中でしたが、両親ともども母の実家がある帯広に引き上げることができました。

父は元の職場に戻ることができず、３年後に北海道庁に再就職し、十勝支庁に勤めることになりました。新潟との関りは、父の生れが魚沼の八海山のふもとの村でした。祖父は村長を務めましたが、事業に失敗し、一家で札幌に移住、父は札幌で育ち、学校を卒業後は帯広の電電公社に勤め、母と巡り会いました。その後、冒頭での話のように、私が満州で生まれました。

大学進学までのこと教えてください

中学生の時、数学の先生（自宅近くに住む若い女教師）にかわいがられ、数学が大好きになり、テストの点数も良かったです。そのせいか、他教科の成績もあ

がり、〝健康優良児〟として育ち、帯広三条高校に進学しました。

高校2年の夏休み、父と電電公社に勤める叔父さんから、「大学進学をやめて、電電公社に就職しないかと強く誘われました。公務員だった父の姿を見ていて、「公務員も悪くない」との思いや同じような状況の親友もいたこともあり、大学への進学を止めにしました。その後は迷いもありましたが、しだいに受験勉強には熱が入らなくなり、高校時代を楽しむ生活を送ったように思います。

しかし、高校3年生の2学期頃、周囲が進学先の志望校などの話をするようになり、それを聞きながら気持ちが揺らいできたことが思い出されます。母に相談して「大学に進学したい」と思い直すようになりました。もともと数学が得意で、中学校の数学の先生になろうと強く思っていた時期がありました。父や叔父さんにも想いを話して「先生」を目指すために受験勉強を再開しました。時期は、2学期半ばでした。進学先は、地元の大学と決めていました。しかし、担任から、今から勉強しても間に合わないと言われ、どうしようかと思いましたが、浪人しても目的を果たす覚悟でした。

受験先は、父や担任から父の出生地が新潟県だったので、新潟大学を勧められました。入学する気持ちはありませんでしたが、受けるだけ受ければ親も担任も納得するだろうと思い受験しました。

数学の点数で合格（入学後に担当の教授からの情報）しましたが、親には「1年浪人させてほしい」「来年必ず道内の大学に合格する」と頼みました。しかし、親からは「弟たちもいるのだから、できるだけ早く独り立ちしてほしい」担任からは「学校としては現役の合格を目標にしている」と説得され、半ばしかたがなく新潟大学教育学部に入学しました。

地学団体研究会（地団研）との出会いは

意欲に欠けた入学であり、高校生の時に期待していた学生運動もなく、つまらない学園生活でした。おまけに梅雨や時雨という「経験したことがない気候とホームシック」で何度も辞めようと思いました。

中学校理科で入学したので、専攻（生物、化学、物理、地学）を考えなくてはなりませんでした。そんな時に教官や先輩にすすめられて地団研の信濃川団体研

究グループの調査に参加しました。高校時代は、生物、化学、物理と履修し、地学は全く未知の分野でした。大学で初めて「地学」に接することで自然科学の面白さと新鮮さを感じました。さらに「団体研究」という、今までに全く経験したことがないスタイルは新鮮そのものでした。数人の班で調査し、調査の成果を持ち寄って、報告し合う。そして、明日の調査についてみんなで相談する。その日の調査結果と翌日の調査内容や参加者の感想・意見などをニュースにして翌朝までに「速報係」が作成する。睡眠時間を削るハードな日程ですが、教官や大先輩も混在一体になって仕事をする。それらのことは全てが初めての体験であり、途方もない魅力を感じました。そのことが地学に目覚めたきっかけになりました。そして専攻を「地学」にすることを決めました。たまたま地学団体研究会（地団研）に巡り合って、団体研究（団研）の魅力の虜になってしまいました。

教育学部は教員養成課程の必修単位や教科に関わる専門の単位を取得するのに忙しかった。加えて地質学の専門の授業は理学部で単位を取得しなければならず、大変だった記憶がよみがえってきます。単位を取得するための勉強はもちろん大切でしたが、血肉として中身を鍛え、生きた力を身につけることができたのは、団体研究のつながりの中だったと思います。「団研」の中で、先輩や教官から地質学の手法や学問を学び、鍛えられたと思っています。そのつながりは、教師として教壇に立ってからも変わらないものがありました。特に「下田丘陵団体研究」の成果は、新潟大学高田分校の研究紀要に投稿しました。その時の団体研究グループのメンバーはもちろんのこと歌代先生をはじめ多くの先輩からの厳しい指導は、今では懐かしい思い出となっています。

教師として未熟だった初任校

私は北海道と新潟県の両方の教員採用試験を受けましたが、北海道からはすぐに採用通知が届きましたが、新潟県からの採用通知はなかなか届きませんでした。当時、就職差別があった時代で、自治会活動やサークル活動などに熱心な人は採用されませんでした。私は心配はしていませんでしたが、栃尾高校からの採用通知が届いた時には、正直に言うとちょっと安堵したことを覚えています。

栃尾高校定時制中心校（夜間部）に着任しましたが、いきなり、学級担任に任命されるという今では考えられない状況になりました。今思えば、〝若さ〟のみを武器にした〝迷担任〟の学級運営を強いられました。経験の未熟さはもちろんですが、教師としての姿勢や理論の未熟さを露呈しながらのスタートでした。「めだかの学校」の歌詞のように、「誰が生徒か先生か」というような学級運営だったように思います。年令もそれほど離れていない生徒から、親しみを持たれ「先生、先生」と呼ばれましたが、〝しっちゃかめちゃか〟な教師人生のスタートでした。それでも鞭をふりふりの「すずめの学校」より良いのでないかとも思ったり…。そんな中で周りの同僚の先輩教師に支えられたり、職員会議で叱られたりのスタートで、懐かしさこみ上げてきます。

先輩教師から教員組合に誘われ、活動のイロハを教わりましたが、今ひとつのめりこめないものも感じていました。それよりも心が通った卒業生や生徒と一緒にわらび座の公演を計画したり、原水爆禁止の市民運動の方が卒業生や教え子たちとのつながりがあり、やり甲斐を感じながら取り組みました。しかし、校長や教頭などの管理職からは、睨まれたり叱られたりの日々が続きました。

そんな状態の中で地団研の活動もおろそかになりがちで、知り合いの先輩からは叱られましたが、身を入れて没頭することはできませんでした。それでも、栃尾での刈谷田川団研や下田丘陵団研を立ち上げ、下田丘陵の地質を調査し、その成果を論文化するという団研活動にもそれなりに関わりを保っていました。

教師としての生き方を学び実践する

転勤した加茂高校で教師としての自覚に一歩目覚めたような気がします。当時、高校現場では「主任制反対闘争」が盛り上がっていました。新潟高教組は「主任隠し」で学期ごとにに「主任」を変える戦術をとっていましたが、責任の所在があいまいになることから私はその戦術にはついて行けませんでした。私を含む学年団は、一番若い私を学年主任に押し立て3年間通しました。その後、クラスを受け持つ度に学年主任をすることになってしまいました。私は、学年運営に関して何事も、学級担任全員の総意で決めることに心をくだきました。その粘り強い学年運営が「教師として

の自覚」を育てくれたように思います。

その頃、私のひと回り先輩の藤井泰一先生が加茂高校に異動してきました。藤井さんの存在は学校全体に活気をもたらし、私も教師としての自覚をさらに高められたように思います。

藤井さんは、新潟高教組の書記長を経験された活動家で、学ぶことが山ほどある経験豊かな先生で、私は大きな影響を受けました。生徒や保護者との関りについて、「こうしなきゃいけない」「こういう具合に考えるのがいい」などとアドバイスや忠告を得たり、いろいろと相談にのってもらいました。

藤井さんの影響が、形として残っているのが学級通信です。あるとき、藤井さんから「私が出した学級通信と同じでいいからいちど出してみろ」と言われました。全く同じに書くわけにいかないので、それなりに考えて毎週発行することを生徒・保護者に宣言しました。そのことが、教師としての自分を変え、一歩高めたのでないかと思っています。その後、クラス担任になるたびに毎週一回出し続けました。毎週学級通信を出すということは、学校での生徒の様子をよく見ることは当然ですが、保護者をとりまく社会の状況などもいろいろ考えねばならないと思います。そのような意識がないと、〝読んでもらえる〟学級通信にならないと思います。その意味では学級通信を出すことは、さまざまなことをを深く考えねばならないので勉強になりました。いろいろな言行や刺激を与えてくれた藤井さんには感謝でいっぱいです。しかし、本当に本当に残念なことでしたが、藤井先生は50才の手前で突然、脳溢血でお亡くなりになりました。

学級通信を出し続けて、「何か良いことがあったか」と言われれば、特別なものはありません。ただ、自分的には、いい加減なことは書けないという緊張感をもって担任生活を送りましたし、教育実践のひとつとしての記録を残せたと思っています。

家族とも相談して、最後は「生活圏にある学校で教壇に立ちたい」との思いで新津南高校に異動しました。当初は地学の授業がなく物理の授業を担当しましたが、翌年からは地学を担当しました。

自分の子どもの友だちが生徒として教室にいるという風景は、初めての経験で少し緊張感がありました。しかし、すぐに慣れて学校の中で「○○ちゃんのお父さん」というのは地域とのつながりが身近に感じられ

ました（子どもは嫌がっていましたが…）。

何れにしても最後の10年を「有終の美」をとの思いで過ごしました。もちろん「学級通信」を発行し、教師生活の中で13回の発行になりました。

石油の世界館友の会の活動

加茂高校への通勤路は、信濃川右岸の堤防上の道路でした。車窓から見える新津丘陵を望みながら、退職後は里山に関係する何かの活動があれば参加しようと思いながら通いました。

退職した２００３年、新潟大学を退官された島津光夫さん、小林巌雄さんから「石油の世界館の状況はなげかわしい。貴重なものが沢山あるのに催しをするわけでもなく、展示の更新をするわけでもない。このままだと朽ち果てるだけだ。一緒になんとかしよう」と話かけられました。そこで、２００３年秋、大学関係の島津さん、小林さん、立石さん、石油会社関係の渡辺さん、小野沢さん、そして地元の中島が集まり、「友の会」設立の準備について相談しました。

「友の会」の性格は「ＮＰＯ法人」でなく「任意団体」とし、純粋に「石油の世界館」を応援する会とする。会長は小林巌雄さん、事務局長は地元の中島哲宏と決めて準備活動に入りました。

準備会のメンバーを募り、２００４年6月に旧新津文化振興財団との共催で講演会と見学会を開催しました。その様子は新潟日報の紙面に掲載されました。その後「友の会」発会の機運が高まり、２００５年6月に「石油の世界館友の会」の設立総会を行い、来年は「設立２０年」を迎える年になり、感慨深い思いがこみ上げてきます。この間、講演会、学習会、野外見学会、地学ハイキングやバス見学会、こども自然教室、館内外のガイド活動、学校教育への支援活動と忙しく活動してきました。それらの活動が「行政や石油の世界館」を応援するる活動になり、行政からの支援や協力が「友の会」活動を後押しするという「双方向での活動スタイル」を創り上げてきました。

退職後は「石油の世界館友の会」と「新潟勤労者医療協会健康友の会」という「二つの友の会」それぞれのワラジを履いて全力でに走って、いつの間にか20年が経ってしまいました。しかし、国の文化行政や医療福祉の体制が貧弱化している中で、さまざまな問題や課題に悩まされてきました。私たちの活動を次世代

に引き継いで発展させていくためには、おおもとからの変革の必要性を痛感しています。

インタビューを終えて

中島さんとは地域での活動を共にする機会が多い方です。インタビューは2時間ほど。淡々とお話してくださいました。初めて中島さんのこれまでの活躍と活動ぶりを知ることができました。

紙面の関係で、お話された退職後の「勤労者医療協会　健康友の会」や「秋葉区九条の会」などの活動ぶりは紹介できませんでした。ご容赦ください。

（文責　編集部　和澄利男）

新聞小説を読んで

私にとって、毎朝、新聞連載の小説を読むことはなかなかできないことの一つである。ときどき読んでいた新聞小説が今年の3月、1冊の本になった。池澤夏樹の「また会う日まで」（朝日新聞出版）である。

そのなかで、井上茂美（海軍大将）の言葉の引用がでてくる。473頁。そのせりふのひとつは、「昨今英語を敵視する空気が民間にある。兵学校においてさえ英語の授業を縮小、あるいはいっそ廃止してはいかがかなどという輩がいる。井上さんはこれを一蹴した。この世界のどこに英語のできない海軍士官がいるか！」さらに、もうひとつは「冷静に考えればこの戦争に勝ち目はない。戦争が終わったあとで若者たちが生きていくための教養と知識。井上さんは戦後まで見ているんだよ」今、ウクライナやパレスチナで悲惨な戦争が起こっている。愚かな政治指導者のもとで国民は悲惨な目にあう。日本でもコロナでひどい目にあった。戦争を止め、戦後のことを考えるべきだ。なにをなすべきか。

（伊藤）